

第14回東北大学歯学会講演抄録

日時：昭和63年11月19日（土）

場所：東北大学歯学部B棟講義室

— 一般演題 —

1. 形成期エナメル質へのオサゲオレンジレクチンの結合性

秋田博敏（口腔解剖2）

歯胚に関する標識レクチンを用いた組織化学的研究から、オサゲオレンジレクチン(MPA)が、形成期エナメル質へ特異性の高い結合をすることを示した。

所見は、主に、パラホルムアルデヒド固定した組織のパラフィン切片を蛍光顕微鏡により観察して得られた。その他、形成期エナメル質とエナメル芽細胞に関する所見の一部は、グルタルアルデヒド固定した組織のLowicryl K4M樹脂切片を電子顕微鏡により観察して得られた。蛍光標識または金コロイド標識MPAを含むリン酸緩衝液で切片を染色し、検鏡した。標識MPAによる染色（標識MPAの組織切片への結合）が特異的であるか否かを検証するため、対照実験として、阻害糖（メリビオーズ）と標識MPAとを含む緩衝液による染色も行なった。

標識MPAの結合は、切歯および臼歯の形成期エナメル質と、エナメル芽細胞に顕著に見られた。エナメル質へのその結合は、有機基質の脱却に伴って次第に減弱し、ついには見られなくなった。形成期エナメル芽細胞へのその結合は、ゴルジ野とトームス突起に見られた。上皮性歯胚をなす他の細胞へのMPAの結合も見られるが、弱かった。象牙質においては、MPA結合部位が、形成初期の一時期に点状に分布するものの、それ以外の時期には全く見られなかった。また、象牙芽細胞や付近の歯髄にも見られなかった。このような所見は、マウス、ラット、ウサギの3種の実験動物において共通していた。以上の結果から、MPAが、歯の組織において極めて限定された部位へ結合することが明らかになった。また、MPAが、有機性エナメル基質の9割以上を占める糖蛋白（エナメル蛋白）に強く結合する可能性が示された。

2. 身元不明者の社会学的考察

山田文夫（医学部法医）

社会医学の一分野である法医学は、その実務上、身元不明の変死体の検案と行政解剖を行っている。私は法医歯科の立場から身元不明者の個人識別を行っているが、最近特に老人の身元不明の変死体に接することが多い。そこで法医学の立場からその実態と社会的背景について人口動態統計特殊報告、宮城県警らの統計で検討した。

変死体を大別すると内因死（病死）、不慮の事故死、自殺死である。

不慮の事故死は乳児期に比べて少年期に低下、少年後期から急激に増加し、30歳代青年期に安定、その後は加齢と共に増加する。

各年齢共女性の死亡率が男性に比べて低い。

不慮の事故死、自動車事故死、不慮溺死、自殺死の比較では10大都市、その他の都市、郡部との順で高くなる。

配偶関係別では老年期の男性未婚者に不慮の事故死が多い。

自殺死亡年齢曲線比較では男女共有配偶者は未婚者、離別者、死別者に比べて低い。

動機別では病気を気にしての自殺が男女共高齢と共に高率となり、自殺全体の70%をこえている。

宮城県下の身元不明の変死体は毎年400~500体であり、男性は女性に比べて約1.5倍である。

死因別では内因死（病死）が多く中毒死、凍死、焼死、縊死、溺死で、職業別では無職、労務者、そして銀行、会社の団体役職員、農業の順で上位を占めている。原因動機別では病苦と精神異常、ノイローゼ、家庭不和の順である。最近では職場事情での自殺する男女、70歳以上の女性の自殺死が増加している。

以上変死体の実態調査からも身辺にせまった高齢化社会の姿があり、社会医学的立場からも我々は無関心ではいられない。